

# Asian Breeze

エイジアン・ブリーズ55号・平成21(2009)年2月発行 年3回発行



いま、女性たちは……………	1	海外通信員北九州市訪問……………	8
誌上セミナー……………	2	海外通信員レポート……………	9
アジア女性会議……………	3	フォーラムの窓……………	10
財団設立15周年記念講演会……………	7	インフォメーション……………	11

NO. **55**  
FEBRUARY 2009

# いま、女性たちは

## すべきことをどう捉えるか

本物のチームワークは1足す1を2以上にしますが、男女混合のチームは、それを大きく上回る力を持ちます。男女の異なる観点がお互いを補いあい、包括的で刷新な仕事を可能にして、新取の気概に富むチームが成長するからです。

これが、社会・経済活動に参加したい女性への差別をなくしてこそ得られる大きなメリットです。この理屈は簡単ですが、どのような組織でもリーダーの頭とハートが繋がらないと、本気でやる気は起こりません。実体験が最も早い近道とはいうものの、女性が少ない職場では体験さえ稀なことです。

その悪循環を破ってほしいと、男性の組織文化が強い某国際援助グループに頼まれたことがありました。当時、世界銀行で体験していたことをぶつけてみたらよく効いたのですが、その時の講演を抜粋してみましょう。

\*\*\*\*\*

世界各国が直面する開発問題への解答は、「何をすべきか」ではなく「すべきことをどう捉えるか」にあります。

エネルギー関係の仕事に就く皆さんは、電力という言葉から何を連想するのでしょうか？（…点滅スイッチの音…発電所…太陽光発電…）なるほど…。皆さんが抱くイメージには、女性の影さえ写っていません！（笑）

その女性の居る所へ案内しましょう。

インドの内陸奥深い在所。藁葺き屋根に土壁の農家。真っ暗な家の中。かまどからちらちら漏れる薪の火。猛煙の中に土間にしゃがんだ人の影。背の乳飲み子をあやしめながらパンの生地を練り、平らに潰してかまどの壁に叩き付け、煮えたぎる鍋の中身をかき回し、くるくる働くその人。乳飲み子の小さな咳が止まりません。苦しうに泣く子の背を叩きながら、その人も咳き込みます。振り返って恥ずかしそうに微笑む彼女の目は真っ赤に充血して、止まぬ涙で頬がひび割れています…。

かまどの煙は、数々の病気を大きく上回る死亡原因です。その煙が毎年約2百万人の女性と子どもを世界中の途上国で殺しています。インドでは、母親の背で煙にさらされる幼児の急性呼吸器官炎症や伝染病の感染率が通常の6倍にもなります。きれいな電気を引くだけで、5歳以下の幼児死亡率が半減するのです。



元世界銀行副総裁  
シンクタンク・ソフィアバンク パートナー  
西水 美恵子

瘦せ細った少女が薪を運んできました。ひと束は頭に、もうひと束は腰に、灼熱の空の下を何時間もかけて集め歩いた薪。その薪を土間に置いてしゃがみ込んだまま死んだように動かないその人。20歳に満たない彼女のお腹が大きく膨らんでいます…。

薪集めや水汲みの重労働に女性が1日平均6時間を費やすインド農村地帯では、流産の率が3割にもなります。その重労働は、農村での発生率が異常に高い子宮脱出症の主要原因です。煙たい台所に入り浸る妊婦の死産率は、通常の倍ほどの高さになります。医療部門の援助のみでは防げないこと。癒やす力は電力にあるのです。

人の命や病の苦しみをお金に換算することはできませんが、無煙かまどを備えるだけでも、毎年1人あたり約5千円から1万円の国家医療費が節約される計算になります。電気を引けば、その倍の約1～2万円の節約になります。貧民人口世界一のインドはもとより、途上国経済に与える影響は、膨大なものです。

室内汚染は殺人魔。この発見は、電力開発事業の社会利益に対する判断基準を大きく変えつつあります。その問題に焦点をあてたのは、医学者や、エコノミスト、エンジニアなどが参加した世銀のチームでした。

多分野の専門家が情熱をひとつにして成した調査でしたが、男女混合のチームだったからこそできた仕事なのです。そもそも、かまどの煙に潜む魔を自分の体で知り、人の命にかかわることと世銀の組織を動かしたりリーダーが、女性だったのです。

人類の半分を見落とすのは思考に障害を持つことと変わらない。馬鹿だったと笑える日は必ず来ます。

\*\*\*\*\*

何をすべきかではなく、すべきことをどう捉えるか。この違いが組織を動かし、国を変え、人の命さえ救うのです。

### 西水 美恵子 Mieko Nishimizu

社会起業家育成を通じて新社会システムの創出を目指すシンクタンク・ソフィアバンクのパートナー。プリンストン大学で経済学を教え、1980年世界銀行に入行。種々構造調整問題に関わる。南アジア担当副総裁を6年間勤めて2003年退職。南アジア諸国以外にも、中国、エジプト、ハンガリー、タイ、トルコなどに関わった。

ジェンダーの視点に立った  
HIV/AIDS対策

## 第1回

## ～疾病と社会～

結核予防会国際部 医員  
産婦人科医

剣 陽子

## Profile

NGOの医師としてミャンマーでの保健医療活動や、結核/HIV重複感染対策専門家としてカンボジアでの独立行政法人国際協力機構（JICA）結核対策プロジェクトに従事。現在は、エンゼル病院（北九州市）における産婦人科臨床、リプロダクティブ・ヘルス/ライツの実現、エイズ対策、結核対策など国内外での公衆衛生活動に関わっている。

HIV/AIDSというのは、1つの疾患です。「HIV/AIDS対策」と言うと、皆さんはどんなことを思い浮かべるでしょうか。

「病気」と言えば、検査・治療でしょうか。検査や治療は、医療機関内で行われる行為となります。HIV感染に関しては、血液検査でHIVに感染しているかどうかを調べ、陽性であれば免疫の状況や体内のウイルス量を測定し、その具合に応じて治療＝抗HIV薬の投与を開始します。この、HIVの血液検査による診断と、投薬による治療に関しては、大掛かりな医療機器なども大して必要なく、先進国はもちろん、近年では途上国でも広く行われるようになってきています。例えば、私が2005年末から2年半ほど滞在していたカンボジアでも、現在では全国に200近いHIVテストセンターが設置され、50近いHIV/AIDSの治療を行っている医療施設があり、2万6千人以上が抗HIV薬の投与を受けていると言われています（2007年）。

では、医療機関での検査・治療の体制を整えば、その病気は制圧されていくのでしょうか。答えは、否です。日本においても、新規HIV感染者数は増え続けていますし、自分がHIVに感染しているとは知らず、症状が出てきて（AIDSの状態になって）初めて病院を受診する患者さんも少なくありません。このことからわかるように、病気の対策は医療機関の中で行われているだけでは不十分です。その患者さんを取りまく社会状況も、病気の対策の動向を左右する大きな要因なのです。ここでは、特に「ジェンダー」に注目して、HIV/AIDS対策について述べたいと思います。

HIVの主な感染経路には、性的接触によるもの、注射針の共有によるものなどがあります。つまりHIVの感染には、人間の「行動」が大いに関係しています。ですから、ある社会での最初のHIV感染の流行は、「（コンドームを使わない）性交渉」や「注射針の共有」といった行動を取りやすい、一定の集団の中で起こり始めます。例えば、性風俗産業従事

者や男性同性愛者、静脈注射薬物乱用者などが、特にHIVに感染しやすい集団であると言えます。こういった集団は、世間から差別・偏見を受けることが多く、また地域によっては法的・宗教的にタブーとなっていることもあり、一般社会から隠れた状態で暮らしていることも少なくありません。こういう状況では、こういった集団の人たちが、いわば「表社会」で繰り返されている「エイズ対策」にたどり着くことが非常に難しくなります。


例えば、性風俗産業従事者に対して「HIVに感染するリスクを背負うような仕事をやめればいい」と単純に考えるかもしれません。しかし、性風俗産業従事者の中には、貧困のために、この仕事に就かざるを得ない人もいます。やめたくても、借金を背負っていてやめられない場合もあります。女性の地位が低かったり、女兒には教育を受けさせる必要はないと考えられていたりするような社会では、この傾向は顕著になります。それでは「コンドームを使えばいい」と考えるかもしれません。しかし、男性にはコンドームの使用を嫌がる人も多く、また売春宿のオーナーに「HIV/AIDS対策」の意識がない場合は、性風俗産業従事者が自腹でコンドームを購入して使わなければなりません。コンドームの「常時使用」というのは、案外難しいのではないのでしょうか。いや、教育を受けていない女性であれば、性交渉によって病気になるとか、予防にはコンドームが有効だとか言うような情報すら入ってこないかもしれません。こうして考えていくと、性風俗産業従事者のことだけでも、問題や困難は芋づる式に挙げられていきます。

世の中には、まだまだ「HIV/AIDSなんて『特別な』人の病気で、自分には無関係だ」と考えている人がいるかもしれません。皆が、そして対策を講じる国が、このように考えていると、HIV/AIDSに感染しやすいと言われている集団内だけで流行している段階では、なかなか有効な対策がとられません。そうこうしているうちに、HIV/AIDSの流行は、こういった集団の外にまで広まっていきます。

# アジア女性会議 — 北九州

「地球を食べる、地球で食べる — あなたは食を通して何を考えますか？」

(財) アジア女性交流・研究フォーラム (KFAW) は「地球を食べる、地球で食べる — あなたは食を通して何を考えますか？」をテーマに、2008年11月15日 (土) と16日 (日) の2日間にわたって、北九州市立男女共同参画センター “ムーブ” で「第19回アジア女性会議—北九州」を開催しました。

プログラム	
	<b>11/15</b> 13:15-14:45 パネルディスカッション (土) 「地球を食べる、地球で食べる—あなたは食を通して何を考えますか？」
	15:00-17:00 ワークショップ&日韓国際セミナー ワークショップ 1「今の食は未来の私」 2「“食”を取り戻すカー—不均衡を乗り越える」 3「空飛ぶ食べ物」 日韓国際セミナー「日本と韓国における移住女性の現在—その文化的葛藤と健康問題」
	<b>11/16</b> 10:00-12:00 国際シンポジウム「東アジアの家族は今—仕事、結婚、子育て、介護」 (日) 13:00-16:00 KFAW研究員報告会

## ■パネルディスカッション

「地球を食べる、地球で食べる  
—あなたは食を通して何を考えますか？」

### ●コーディネーター

喜多 悦子 日本赤十字九州国際看護大学学長  
WFP (国連世界食糧計画) 協会顧問

### ●パネリスト

ラメッシュ・ジェイン 前FAO (国連食糧農業機関) 専門官  
田原 幸子 グリーンコープ生活協同組合ふくおか理事長  
ホン・ミヒ 仁川市女性政策センター所長

残留農薬やBSE、産地偽装や薬品混入など、昨今食の安全は大きく揺らいでいます。一方、開発途上国における飢餓のまん延は言われて久しく、地球規模での食糧資源の不均衡は今もなお続いています。

このパネルディスカッションでは、コーディネーターの喜多さんの司会進行のもと、3人のパネリストの方に発表していただき、私たちの身近な食の安全と世界的に日々深刻化する食糧資源の不均衡という2つの問題を、ジェンダーの視点を踏まえながら考えました。



▲パネリストの田原さん、ジェインさん、ホンさん

まず田原さんに、グリーンコープの取り組みを発表していただきました。

グリーンコープの食の安全への取り組みにおいて、重要なのは「母親の視点」です。私自身、子どもを出産し母親になって初めて、子どもは食べる物で大きくなっていくのだと実感しました。食べ物こそ、私たちの身体を作り、生命を育む源です。

しかし高度経済成長時代以降、私たちの食べ物は、簡単、便利、どうしたら長持ちするのか、どうしたら価格が抑えられるかという経済効率優先の中で、大量生産・大量消費されてきました。この経済効率優先の商品を「生命を育む食べもの」に戻していこうという「生命を育む食べもの運動」を展開しています。例えば、野菜なら、農薬を使わないとか、農薬を使う回数を決めるとか、家畜なら、どんな飼料を使うのか、飼育環境をどうするのか、加工品なら、添加物をどう使うかなど、生産者と話し合いながら商品を開発しています。

またこの運動では、南北の共生にも取り組んでいます。約20年前、フィリピンのネグロス島で起こった飢餓が日本の飽食と関係していることを知り、地球の北側に住む私たちが、地球の南側の生命、自然、生活を搾取して飢餓を発生させている経済構造の実態を学ぶことになりました。ネグロス島の人びとを飢餓から救いたいという思いから、ネグロス島ではあまり食べられていないけれど日本人の口に合う、バランゴンバナナを買うという民衆取引を開始しました。農村部では、女性がバナナの出荷作業をしており、若者と共に地域づくりの主体になっています。ネグロス島の人びとと交流し、バナナ以外の生産物の加工などの仕事をつくりだすことを目指して、現在活動しています。

次にジェインさんに、食糧資源確保の問題をジェンダーの視点から発表していただきました。

食糧をいかにして確保するのかという問題は、地球環境問題や世界経済の情勢などさまざまな要因により日々深刻化しています。このような状況の中で、食糧確保の要となるのは、国内での食糧増産を図ることです。

食糧増産には、女性の役割が大切です。というのも、地球上の全農業生産のうち半分は女性が生み出しており、特にアフリカにおける割合は80%以上です。しかし、これだけの貢献をしながらも、女性の存在は無視されています。農村部における貧困層の70%を女性が占めています。また、農業が主要産業である国において、農業関連の事業に充てられる政府開発援助(ODA)の割合はわずか4%です。さらに、その農業関連事業へのODAのうち、はっきりとジェンダーの視点を組み込んでいるのは10%以下です。

このように女性の貢献を無視することの代償は、非常に大きいものがあります。例えば、ブルキナファソ、ケニア、タンザニア、ザンビアでは、土地や肥料などの資材を男女間で平等に配分すれば、農作物の生産率は10~20%向上すると言われています。また、ホンジュラス、ネパール、フィリピン、ルワンダ、南アフリカ、ザンビアでは、多品種栽培や小規模農耕機、農機具などの新技術の開発および実地テストに女性が関わることで、生産性や収入の面で大きな飛躍が見込まれると言われています。従って、農業に従事する女性の力が十分に発揮できるようになれば、食糧増産が可能となってその確保が進むだけでなく、女性自身が経済成長の恩恵を受けることができるようになります。

現在インドでは、農業を営む女性のエンパワーメントを促進し、それを社会全体の向上につなげようという大規模なプログラムが実施されています。例えば、これまで男性が独占してきた資産や財産に関する権利を、女性も同様に享受できるようにすることなどを目指しています。というのも、女性が男性と同じように資産をコントロールできなければ、いくら働いても実を結ばないからです。以前は男性のみが土地の所有者として登録されていましたが、今は夫婦とも名前を登録するという形に変わっています。これらのことが具体的な結果を出すまでにはもう少し時間がかかりますが、農業分野での男女平等を達成することが、農業の生産性を高めるだけでなく、女性の貧困を解消する上でも重要であり、将来的に良い結果をもたらすと考えています。

続いて、ホンさんから、韓国における食とジェンダーについて発表していただきました。

1980年代、食の問題が政治の世界で取り上げられることはありませんでした。その中で、1989年に民間団体であるミンフエ(Minuhwe)は、政治の世界と人びとの日常生活をつなぐために主婦たちが重要な役割を果たすと認識し、彼女たちを組織化する手段として生活協同組合を設立しました。この消

費者コミュニティは、環境に配慮した食品を共同購入するとともに、日常生活の問題を話し合い、解決を図る場でした。

1990年代には、分断国家の問題として食の問題が起こりました。朝鮮半島における南北の緊張関係が緩和したにも関わらず、民間団体が飢えに苦しむ北朝鮮の人びとを助けることは、国家安全保障上、簡単ではありませんでした。このような中で女性団体は、母親の立場からイデオロギーに関係なく、飢えに苦しむ子どもたちを救おうと主張しました。

また、食の安全性の観点から注目を集めたのは、アメリカ産牛肉輸入問題です。アメリカ産牛肉の輸入に反対するキャンドル・デモが、2008年5月から8月にかけて行われました。このデモで中心的な役割を果たしたグループの1つが、赤ちゃんをベビーカーに乗せてデモ行進に参加した母親たちのベビーカー軍団です。彼女たちは、それまでデモ活動に参加したことはありませんでしたが、インターネットを通じて知り合い、家族の健康を守るために立ち上がりました。

しかしながら、彼女たちの活動だけでは、汚染された食品から身を守り、食の安全を確保することは容易ではありません。なぜなら、食の流通はグローバルに展開されているからです。そのため、1国だけで取り組むのではなく、国境を超えてさまざまな人びとと話し合い、共に行動する世界的なネットワークを構築し、さまざまな国家や国際機関、NGOなどに働きかけることが、食の安全を確保する上で重要ではないでしょうか。

最後に、コーディネーターの喜多さんが「食の安全を保つ上で、食の量というのは重要な視点の1つです。この点において、先進国と開発途上国の状況は全く違うものですが、世界的な飢餓の問題を私たちは認識しておかなければいけません。また、現在起こっている食の問題は、紛争や災害のような目に見える危機と比べて、目に見えにくく、ゆっくりと進行する健康の危機です。気がついたときには、多分取り返しがつかないことが起こっています。ですから今、食の安全確保に取り組んでおかないと、次の世代に影響を及ぼし、その再生産を不可能にするようなことが起こるのではないかと危惧する時期に来ているのではないのでしょうか。この意味で、人類の再生産を担っている女性の役割を、より真剣に考えなければいけないと痛感しています。また、食を取り巻くビジネスを、継続的に、そして適切に運営していくことについて、もう少し真剣に考えたほうがいいのかではないのでしょうか。これを企業の責任とって任せてしまうことには、一抹の不安があるのではないのでしょうか」と総括されました。



▲コーディネーターの喜多さん

## ■ワークショップ

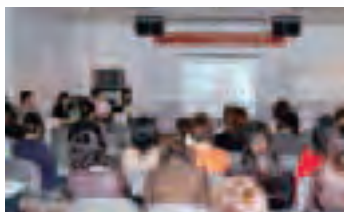
引き続き、パネルディスカッションでの問題提起を受けて、それぞれの視点から「食」について考えるワークショップを開催しました。

## ■ワークショップ1 「今の食は未来の私」

### ●ファシリテーター

米光真由美 西日本工業大学養護教諭  
小野 沙智 西日本工業大学工学部4年  
四海 飛鳥 西日本工業大学工学部3年  
林 綾子 西日本工業大学デザイン学部2年

心と体の健康を考え  
た「大学生による、大  
学生のための、食育ワー  
クショップ(通称お弁当  
の日)」の活動を行って  
いるメンバーが大学生



の視点から、食の安全と共に、男性が料理を作ること、さらには性別による役割分業などについて発表し、参加者と意見交換をしました。

## ■ワークショップ2

### 「“食”を取り戻す力—不均衡を乗り越える」

### ●ファシリテーター

藤井 大輔 九州国際大学国際関係学部助教



世界では、8億人を超える人びとが、十分に食べる物もなく栄養不足の状態にあります。彼らは、どのような生活をしているのでしょうか。ある開発途上国のある村で農業を営む家庭

で起こる、さまざまな出来事を疑似体験し、世界で深刻化している飢餓の実態について参加者と一緒に考えました。

## ■ワークショップ3 「空飛び食べ物」

### ●ファシリテーター

KFAWカレッジ受講生

今年度のKFAWカレッジで開催したファシリテーター養成講座の受講生が、講座で学んだファシリテーション能力の実践の場として、



食料自給率を題材にしたワークショップを運営しました。特に私たちの身近な食事に注目し、日本の食料自給率が上がった場合の影響として、私たちの家庭は、地域は、日本は、そして世界はどうなるのかなどについて参加者と活発に話し合いました。

## ■日韓国際セミナー

「日本と韓国における移住女性の現在

—その文化的葛藤と健康問題」

異国の地で生活する人にとって、自らのアイデンティティーを保持しながら、移り住んだ土地の文化に適応していくことは非常に重要な問題です。もし異なる社会の中で生活することになった場合、移住者にはどのような影響が及ぶのでしょうか。もし

慣れ親しんだ「食」を身近に得ることができなくなるとしたら、どうなるのでしょうか。このような問題について議論するために、韓国・忠清南道女性政策開発院との共催でセミナーを開催しました。

### ●コーディネーター

ジョ・ジョンナム 高麗大学校政治国際関係学科教授

### ●発表者

キム・ヨンジュ 忠清南道女性政策開発院研究員  
平野(小原)裕子 九州大学大学院医学研究院准教授

### ●コメントーター

山下 ゆかり グローバルライフサポートセンター代表  
ムン・キョンヒ 忠清南道女性政策開発院研究員

移住先およびその国の文化に適応するにあたって起こる問題は、食事を作る・食べるという側面にも表れます。国際結婚で韓国にや



ってきた女性は、韓国料理を受容するだけでなく、そこに母国の食材を取り入れたり、母国の調理法で料理を作ったりすることで韓国の食文化に適応してきました。また、時には同郷の人びとと集まって母国の料理と一緒に食べたり、母国の食材を融通しあったりといったネットワークを構築することも行ってきました。

この同郷の人びととのネットワークは、異文化の中で生活する移住者にとって、お互いに情報交換するだけでなく、励ましあうことができるという点から、肉体的・精神的な健康を維持する上でも大変重要だそうです。

今回のセミナーは、多文化共生社会に対する認識を深め、共生する共同体をつくるためのあり方を模索する議論と考察の場として、非常に意義深いものとなりました。

## ■国際シンポジウム

「東アジアの家族は今 —仕事、結婚、子育て、介護」

東アジアでは、急速な経済発展に伴って、女性の雇用増加、結婚観・離婚観の変化、少子化・高齢化などにより、家族の形態や機能、意識や規範が大きく変容しています。そこで、東アジアの各国・地域の最新の事情や課題について考えるシンポジウムを開催しました。



「中国の託児政策と現状 —女性の就業を支援する視点から」

和 建花 全国婦連婦女研究所研究員

中国では、これまで女性の労働参加を保障する施策の1つとして幼児保育を重視してきました。しかし、計画経済から市場経済体制へ移行する中で、保育料の高騰もあり、幼児の入園率は毎年下がってきました。

この発表では、公共サービスとしての保育事業の状況と問

題を把握し、それらが女性の社会進出に与える影響を分析するとともに、ジェンダーの視点からいくつかの保育政策を提言しました。

## 「女性高齢者の介護と家族関係 —上海市を中心に」

桂 世勳 華東師範大学人口研究所終身教授

中国の上海市では、1979年に65歳以上の住民の割合が全体の7.2%に達し、高齢化社会となりました。これは、日本よりは9年遅かったのですが、中国全体の平均からすれば21年も早く、上海市は中国で最も高齢化の進展の早い大都市です。

今回、上海市における高齢化社会問題と高齢者介護の現状、そしてその対策について発表しました。

## 「韓国の家族変動と高齢者介護」

ホン・スンア 韓国女性開発院家族政策研究部研究員

韓国では、日本と同様、低出生率と高齢社会の急速な進展が問題となっています。特に高齢者介護政策についてはごく最近まで議論されることはありませんでしたが、2008年7月から韓国でも介護保険制度が導入されました。

この発表では、韓国における家族の変容と高齢者介護の現状および課題について報告しました。

## 「台湾における国際結婚の増加と課題」

陳 小紅 台湾政治大学社会学部教授

2008年8月現在、結婚のために中国本土から台湾地域に移住してきた人は25万人を超えています。そして、その移住者の95%は女性です。2004年まで、本土からの移住者は複雑で手間のかかる市民権獲得手続きを要することになっていました。現在、この制度は改善されていますが、就労問題など、いまだにさまざまな点で、多くの移住者およびその配偶者は政府に対して不満を抱えています。

今回、こうした台湾における、いわゆる「兩岸結婚」の増加の状況とその課題について発表しました。

## 「現代日本の結婚とワーク・ライフ・バランス」

篠崎 正美 KFAW主席研究員

日本では、少子化と長寿化により急速に高齢社会が進展し、今や「超高齢社会」とまで言われています。それに伴い、社会保障制度を含めたさまざまな分野で、その持続可能性が危ぶまれています。

こうした状況を踏まえ、今回は、日本では何が起きているのか、またそれはなぜ起きているのかを、家族形成の中心である結婚に焦点を当てつつ、家族観の変化やワーク・ライフ・バランスの確立について、問題提起の意味も含めて発表しました。

## ■KFAW研究員報告会

KFAW研究員が、織田由紀子主席研究員の司会進行のもと、それぞれの日頃の研究成果を発表し、参加者と意見交換を行いました。

客員研究員制度は、研究部門の強化・充実のための制度で

す。主席・主任研究員とは異なったテーマで2年間研究を行っており、今年是最終報告の年にあたります。

なお、各研究報告の詳細については、報告書が完成次第、ウェブサイトで公開します。



## ●客員研究員

### 「自治体におけるポジティブ・アクションの現状」

湯浅 壘道 九州国際大学副学長

地方自治体の入札および契約において、男女共同参画社会の形成に向けた施策の1つとして実施されている、民間事業者のポジティブ・アクションの実施状況を評価する方法について、その現状と課題について報告しました。

### 「中央アジア諸国におけるコミュニティ研究 —ウズベキスタン、タジキスタン、キルギスにおける女性のコミュニティ活動を中心に」

大谷 順子 大阪大学大学院人間科学研究科准教授

#### ●共同研究者

大杉 卓三 九州大学大学院比較社会文化研究院助教

河野明日香 筑波大学大学院人文社会科学部研究科准研究員

ソ連解体による独立以降、多様な民族、文化、宗教から構成される中央アジア諸国は「脱ソ連化、国民統合、新国家形成およびその維持」についての問題に取り組んでおり、こうした国家建設の過程で、地域コミュニティが政府により重視されるようになってきました。今回は、この地域コミュニティにおける女性の地位や役割について発表しました。

### 「東北アジアにおけるジェンダー予算分析の潮流 —日本、韓国、台湾を事例として」

市井 礼奈 南オーストラリア大学ワーク・ライフ・バランス研究所研究員

#### ●共同研究者

村松 安子 東京女子大学名誉教授

男女共同参画社会の形成に非常に大きな影響力を持つジェンダー予算について、世界的動向、東北アジアにおける実施状況および日本における男女共同参画関連予算の3点について報告を行いました。

## ●研究員

### 「インド、グジャラート州における女性グループのエコビジネス —ESDの視点から」

太田 まさこ 主任研究員

2007年11月にインドのグジャラート州で実施した、女性グループによるエコビジネスの実態と環境への意識およびその活動の社会的影響に関する調査について、ESD(持続可能な開発のための教育)の視点で分析し、その結果を報告しました。

# 財団設立 15周年記念講演会

(財) アジア女性交流・研究フォーラム (KFAW) の財団設立15周年を記念して、アジア太平洋女性監視機構 (APWW) の前代表で、タイのタマサート大学准教授パワディ・トーンウタイさんを講師にお招きし、ジェンダーの平等に向けた活動の成果とそれを測る指標、その問題や課題についてお話いただきました。



▲講師のパワディ・トーンウタイさん

## ●ジェンダーの平等を測る指標

ジェンダーの平等を具体的に測る指標として、以下の3点が挙げられます。

- (1) 教育を受け健康を保つことで、個人が持つ能力を高められているか。
- (2) 能力を発揮するための資源と機会へアクセスできているか。
- (3) 女性が得た収入に対する妬みを原因とした夫の暴力などを回避できる安全性が確保できているか。

この3点がそろわなければ、ジェンダーの平等が確立されているとは言えません。

## ●MDGsの指標

2000年に策定された国連ミレニアム開発目標 (MDGs) では、教育、雇用、政治参加における男女平等の達成を緊急の課題の1つとしています。

まず、教育については、初等教育における男女平等の達成を目標にしています。この目標は、アジア・太平洋地域の多くの国で達成されています。

次に雇用については、女性の農業以外の仕事すなわち賃金労働への従事、さらには法律や契約に守られた仕事への従事を目標としています。南アジアでは、新産業の発展や経済の成長を背景に、この15年の間に女性が賃金労働に従事する比率が著しく伸びています。しかし依然女性は、職種の制限、昇進の際の不平等な取り扱い、男性との賃金格差など労働市場におけるさまざまな差別に直面しています。

最後に政治参加についてですが、現在、国会における女性議員の割合の世界平均は14.9%です。一方、国連の目標値は30%です。この目標を達成している国はアジア・太平洋地域ではいまだにありませんが、ベトナム、ラオスといった社会主義国で割合が高くなっています。これは、党名簿の割当制 (日本でいう比例代表制) により、党が比例代表権を獲得した後、女性議員が指名されることで一定数の女性の議席が確保されているからです。こうして、女性の国政参加が奨励されてきました。しかし、国政参加がただちに政策に影響を及ぼすという保証はありません。そこで、国政レベルより能力を発揮できると考えられる、地方レベルへの政治参加を推進する動きもあります。

## ●山積する問題

さまざまな取り組みがなされてはいますが、まだまだ問題は残されています。まず、伝統的な固定観念です。そのために、女性は教育の機会を阻まれたり、職業の選択を制限されたりしています。また、女児の教育には投資しない傾向もあります。

次に、女性に対する暴力です。これは昔から存在していましたが、最近になって国連でも問題視する傾向にあります。

最後に、移住に関する問題です。女性はさまざまな雇用の機会を得て国内外へ移住していますが、これには良い面と悪い面があります。良い面は、女性の雇用の機会が拡大し、個人が収入を獲得できること、国外で働く女性からの送金で国も潤うことです。一方、悪い面は、子どもを残して移住することです。また、移住先で暴力の犠牲者となる可能性もあります。さらに、人身取引の対象になることもあります。少なく見積もっても、約140万人の女性が強制労働のために人身取引され、そのほとんどが性産業で働かされています。

## ●将来に向けての課題と問題克服に向けて

まずは、根強い社会通念を打破しなければなりません。また、女性の移住に伴い生じる負の側面を抑制し、管理するための政策をつくらなければなりません。グローバル化がもたらす恩恵と犠牲を正しく理解し、女性の仕事と収入を保証するための対策や、雇用や新たな問題から女性を保護するための方法を考える必要もあります。今後は、女性・男性が本当の平等を築くための包括的な対策が必要なのです。



▲会場の様子

# KFAW海外通信員経験者が北九州市を訪問

(財) アジア女性交流・研究フォーラム (KFAW) では、1991年から海外通信員制度を設け、今年度までに34カ国延べ236人の方々に、各国の女性の状況について報告していただいています。その海外通信員経験者のテリーム・ハサンさん (パキスタン) と、ファイロズ・アフマドさん (シンガポール) が、2008年10月15日から6日間にわたって北九州市を訪問しました。

10/16(木)

## 北九州市立光貞小学校、福岡県立門司学園高等学校訪問

まずは、光貞小学校の3年生全員に自分たちの国を紹介した後、それぞれのクラスで、習字や体育の授業に参加しました。子どもたちと一緒に給食も体験し、昼休みには折り紙を教してもらいました。日本人は恥ずかしがり屋でおとなしいという2人の予想に反して、子どもたちはとても元気が良く、2人を取り囲んで積極的に話しかけていました。



▲光貞小学校での国紹介

次に、門司学園高等学校ESSの生徒たちと、学校生活や、今興味のあることなどについて話をしました。日本の高校生の率直な意見や、教育制度のことなどについて知ることができ、とても充実した時間を過ごすことができました。

10/17(金)

## 女性団体との交流

それぞれの国紹介に続いて、布団たたきや洗濯板など、日本独特と思われるものを2人に見せてクイズを行いました。思いがけない答えに場が和んだ後、2人からの質問に応じて、参加者の方に日本の家族観や女性団体の地域での取り組みなどについてお答えいただきました。それぞれの実体験に基づく貴重なお話に加え、当日早朝から皆さんが用意して下さった食事などの温かいおもてなしに、2人とも心から感謝していました。

10/18(土)

## ワールドリポート発表会

### 「わが国の女性スポーツの状況について」

ハサンさんは、自国における女性スポーツの障害について発表しました。パキスタンでは、子育てや家事こそが女性の第一の義務であるという考えが根強いことや、企業の支援が得にくく、資金が不足していることが大き

な障害となっています。その障害を克服するために、まずは、選手が学生として、教育を受けながらスポーツができるような環境づくりが必要とのことでした。

ファイロズさんは、日本同様に高齢化が進むシンガポールにおいて、特に運動不足で生活習慣病にかかりやすいマレー女性の新しいスポーツについて発表しました。イスラム教徒が大半を占めるマレー女性にとって、現代スポーツはその負荷の高さに加え、露出の高い衣装が問題です。そこで近年、肌を覆う衣装をつけたままで行う、中程度の速さのダンス運動が考案されました。今では、公園などで行われ、その健康的な効果も実証されているそうです。

最後に、コーディネーターの井谷恵子京都教育大学教授が、宗教や文化などに加え、「男性はスポーツができるべき」などの文化的につくられたジェンダーが、スポーツとの関わり方についても影響を与えている、とまとめられました。



テリーム・ハサン  
(パキスタン)

このプログラム、特に学校訪問は、開発途上国から来た私にとって、とても有益なものでした。子どもたちがくれた折り紙や可愛らしい手紙は、いつまでも心に残ることでしょう。私は、このプログラムに参加し、とても温かく、親切な人たちに出会えたことを本当に誇りに思います。私のこの体験を、友人や同僚、家族と共有していくつもりです。また、このプログラムに関わった人たちも、私から何かを得てもらえればと思います。



ファイロズ・アフマド  
(シンガポール)

ワールドリポート発表会では、自国の事例を発表すると同時に、パキスタンと日本の女性の状況や共通する問題についてより深く学ぶことができ、お互いの文化について意見交換を行う良い機会となりました。また、小学校で出会った子どもたちの可愛らしさや、行く先々で受けた礼儀正しく温かいおもてなしは、深く印象に残っています。

その他のレポートはウェブサイトに掲載しています。http://www.kfaw.or.jp/about/18-report.html

## 犠牲になる女性と子ども

ブハワナ・ウパデヒアユ (ネパール)

ネパール共産主義青年連盟(YCL)の一味から拷問を受けた女性の記事が、2008年7月11日付『ザ・カトマンズ・ポスト』紙に大見出しで報じられました。YCLはネパール共産党毛沢東主義派(CPN-M)の青年組織です。この事件は、2006年後半にCPN-Mがネパール政府(GON)との和平協定に調印した後も、国内では女性や女児に対する差別や暴力がはびこっていることを実証するものです。

ネパール全土にはびこっている父権中心の慣習のために女性や子どもが社会の主流から排斥されることは、残念ながらこの国の生活の一部になってはいましたが、それをさらに悪化させる新たな主要因となったのがCPN-Mによってあおられた紛争でした。CPN-Mは1996年に、ネパール国民全体の人権確保をスローガンに掲げて内戦を始めましたが、党自身、女性と子どもにも尊厳ある平等な基本的権利を認めることができていません。

CPN-Mの主張は当初、教育水準の低い農村部の住民の間で支持を得ましたが、その大部分は教育、保健衛生などの公的なサービスをほとんど受けていない人びとでした。CPN-Mは徐々に、人びとに対して暴力、脅し、残虐行為を重ねてきました。

CPN-Mが繰り返し広げる暴力を鎮圧するため展開された、当時の王立ネパール軍などのGON警備組織もまた、さまざまな口実のもとに子どもの権利を侵害しました。

反目する両派閥双方からひどい目に遭わされた子どももいます。その代表的な事件が16歳の少女、カンチ・シェルバの事件です。彼女の記事は2004年4月15日付『サマチャルパトラ』紙に掲載されました。彼女は自宅近くで家畜の世話をしている時に、覆面をした2人のCPN-Mの男に連れ去られました。誘拐後、彼らは村々から遠く離れた山の上にあるCPN-Mの隠れ家まで、彼女に重い荷物の運搬を強要しました。4か月後に、彼女は何とかそこを逃げ出しましたが、今度はGON警備組織にとらえられました。GON警備組織は彼女をCPN-Mの一味だと思い、それから20日間、警らに彼女を連れまわし、彼らが12人のCPN-Mメンバーを拷問・殺害するのに立ち会わされたり、手伝わされたりしました。

そのほかにも、東ネパールでは3人の女子学生が平服の兵士の団に殺害されました。また、西ネパールでも12歳の少女が、彼女の父親がCPN-Mのメンバーに食料を与えたという疑惑のためにGON警備組織に殺害されています。

どうすればこういった問題が解決されるのでしょうか? こういった暴力は行動や体制といった問題に大きく関わっているため、市民社会、圧力団体、政府といった社会全体を変革する集中的な取り組みが必要です。ネパールでは、今まさに新憲法が策定されようとしています。今こそ、女性と子どもの権利擁護の問題にきちんと取り組まねばならない時期なのです。

## 女児の人生に立ちただかる闇の世界

カーンティ・ウイジェトウーング (スリランカ)

スリランカでは、憲法で両性に同等の権利を保障し、女性憲章には女性の権利を擁護する条項が設けられています。にもかかわらず、女性と女児に対する暴力は依然として存在し、特に女児は、周囲の保護監督不足のために、レイプなどの被害に遭いやすい立場に置かれています。

スリランカでは経済的困窮から、貧困家庭の主婦が海外に家政婦として出稼ぎに行く例が多く見られます。主婦がいなくなると、慣れない父親は家事をこなすことができません。男女の役割分担についての固定観念から、1番年長の娘が家事のすべてを引き受け、彼女たちはその負担のため学業を犠牲にすることになります。

父親が責任ある態度を取らない場合、事態はさらに悪化します。父親は妻からの仕送りを浪費し、薬物やアルコールに依存していきます。友人を招いて自宅で酒盛りをし、娘に食事の支度や接客を命じます。そのような状況の中で、女児が性的・精神的暴力の被害者となります。そんな目に遭った1人の幼い少女の悲劇が、先日ある新聞記事によって公になりました。

マラは長女で、弟が2人いました。彼女が14歳の時に、母親は中東に家政婦の出稼ぎに出ました。当初は祖母も家事を手伝ってくれましたが、1年後その祖母が亡くなってからは家事の負担が全部彼女にかかり、結局、彼女は中途退学を余儀なくされました。それでも家族は、お金を稼いでくれる母親を呼び戻したくなかったのです。

徐々に父親の態度が変わりはじめ、酒浸りの毎日になりました。家で友人に酒をふるまうようにもなり、ある日彼女は、そんな父の客の1人にレイプされました。こんな恐ろしい事件にあっても、彼女は無力でした。そのことを打ち明けられる親しい人間が周りにいなかったからです。マラは自分をレイプした男が、父親にとって支配的な立場にあることを知っていたので、父親にも話すことができませんでした。後日、出血して倒れ、病院に運ばれたことで、この痛ましい話が明るみに出たのです。

どこの国であろうとも、暴力や性的嫌がらせが少女の成長に負の影響を与えることは明らかです。従って、こういった問題をなくし、少女たちが尊厳と最大限の可能性をもって成長できるような措置を講じることが必要不可欠であり、スリランカでも、警察署への女性・子どもデスクの設置が確実に進展しています。

しかし1番重要なのは、女児の保護監督に関心が向けられることです。少女たちを覆う闇の世界を公にし、彼女たちの人生に希望の光をもたらすために、人びとを教育し、その意識を向上させていくことが必要です。



▲幼いきょうだいの世話をする少女

## 花嫁の売買 —インドネシアの契約結婚

グロリア・アーリニ(シンガポール)

インドネシアでは近年、女兒に対する搾取や暴力を撲滅しようとする取り組みが進んでいます。市民団体が、草の根レベルでこの取り組みを注意深く見守る一方、政府や政策レベルでも注目を集めつつあり、子どもに対する暴力の根絶に向けて国家的な取り組みを推進する国家レベルの児童保護国家委員会(KPA)が組織されました。KPAでは虐待を、性的虐待(人身取引、売春など)、身体的虐待(家庭内暴力など)、精神的虐待、放棄(保健衛生や教育の放棄、仕事の強要など)の4種類に分類しています。

しかしインドネシアには、契約結婚というものがあり、それを前述の虐待分類に当てはめようとしてもうまく当てはめることができません。立会人(時には招待客までも)がいる中でイスラム教聖職者がとり行なう結婚式において、男女が婚姻するという点では「適正な」結婚です。ただ普通の結婚と違い、この結婚は契約で決められた期間(2日から数年までさまざま)で終了します。ほとんどの場合、現金が一括払いまたは花嫁への定期的な生活費として支払われます。契約期間が終わると2人とも独身に戻り、互いに何の結びつきもなくなります。

これは、もはや公認売春とでも呼ぶべきものです。裕福な男性が少女を買い取ってその身体をどのように扱ったとしても、これは許されることであり、宗教的には恥辱でも罪悪でもないのです。しかし、この結婚で最も苦痛を味わうのは、もちろん少女たちです。契約結婚する花嫁を確保するのは、地元の仲介人や、つなぎ役を専門にする売春あっせん業者です。契約金につられた家族や親戚が、少女に強制したり脅したりして契約結婚にこぎつけることも珍しくありません。少女たちの大半が金銭的に極端に困窮している家庭の娘で、安易に生活費を稼ぐ手段として契約結婚が行われているのです。

道徳的、社会的、宗教的に眉をひそめられる売春とは違い、娘を契約結婚に差し出す親は「これは、娘を裕福な男に嫁がせる良縁なのだ」として道徳的な非難を逃れようとします。そして、少女たちが商品として貸し出されて夫婦間レイプや家庭内虐待の被害に遭い、生涯続く外傷や恥辱に直面するという事実は、都合よく忘れ去られます。幼くても1人の女性である少女の声など無視される—このようなことが、インドネシアのような男性中心の国ではまかり通っているのです。

契約結婚させられた女性の中には、労せずして手に入る収入に慣れてしまい、どんな花嫁とでも契約結婚するようになってしまう者も確かにあります。しかし、そのような場合でも、少女たちの自由な人間としての権利や希望を完全に無視し、モノのように扱う慣習がもつ搾取的要素が無くなるわけではありません。

搾取は、暴力的要素と関連付けて定義されることがよくありますが、必ずしもそればかりではありません。女兒に対する搾取・虐待を、有効かつ完全に根絶する取り組みを推進していく場合、政治家や専門家は、女兒に対する詐欺やさげすみなどの、より目につきにくい要素にも目を向ける必要があります。残念なことに、男性中心社会では、文化が女兒に不利に働くために、慣習や伝統の名のもとに搾取が覆い隠されてしまいます。これらを慎重に見分けるのは、私たちの手にかかっています。

## フォーラムの窓

### 外から見る日本

グローバル化が進み、国境を越えた人の移動は今や目新しいことではなくなりました。法務省の統計(参照 <http://www.moj.go.jp/>)によりますと、2007年度、国外へ出国した日本人の数は約1,729万人で日本に入国する外国人より約814万人も多く、いかに多くの日本人が世界中を動き回っているかがうかがえます。人の移動は、出身社会の良いところも問題も持ち込みます。海外における日本人のイメージが必ずしも車やカメラに象徴される明るいものばかりではないのではないか、ということを実感する機会が何度かありました。

少し前のことですが、フィリピンで「ヤクザ」という日本語が普通に通用していること、実際にヤクザが絡む事件の被害者が少なくないことを知り申し訳なく思いました。また、タイのある街でたまたま入った日本食の店に置かれていた日本語の情報誌に、いかにして日本人の中老年男性がタイで若い女性とお友達になるかについてとくとくと書かれていたのを見てあきれたこともあります。このような記事を読んだ後、街で日本人の中老年男性と若い女性のカップルを見るとついその記事を思い出してしまいました。

さらに最近、人身取引の被害に遭い日本から母国に戻った女性たちの話を聞く機会もありました。彼女たちが日本で経験したつらい体験には胸を痛めました。それとともに驚いたことは、彼女たちが日本で滞在していた都市が広く全国各地に及んでいたことです。いかに私たちの周りに人身取引の被害者が大勢いるのか、今まで見てこなかった日本社会の現実を突き付けられた気がしました。彼女たちの目に映った日本は、私の知っている日本の社会とはかなり異なるものだったに違いありません。

このような経験をするたびに、外国の人に日本はどのような社会だと映っているのだろうかと思わずにはいられません。グローバル化の時代、世界中の人が地球上を動き回っています。外の目で自分たちの社会を見直す良いきっかけになるのではないかと思います。

日本赤十字九州国際看護大学教授  
(財)アジア女性交流・研究フォーラム主席研究員  
織田 由紀子

# INFORMATION

## Q & A 質問コーナー

～読者から寄せられた質問に、  
通信員がお答えします～

日本では、1人でも、友だち同士で遊ぶ時でも、ゲームに熱中する子どもが多いです。あなたの国で、子どもたちがよくする遊びは何ですか？（その2）

質問者 細田 泰弘（北九州市）

### 私がお答えします。



大浜 慶子  
（中国）

現在40歳前後の中国人に、自分たちが子どもの頃にどんな遊びをしていたのか尋ねてみました。すると、男の子、女の子それぞれに違った遊びをしており、男の子はビー玉遊びやかくれんぼ、女の子はゴム跳びや、内と外に分かれてお手玉を投げつける遊びなどを楽しんでいたということでした。幼い頃から、自然と男女別のグループに分かれてはいましたが、男の子も女の子も屋外で活発に遊んでいたようです。

しかし現在では、1人っ子政策の実施により、子どもの数が激減しています。親たちも過保護になり、下校時には一斉に幼稚園や小学校に駆けつけて、わが子を家に連れて帰ります。きょうだいがいないため、子どもたちは家の中で自分1人か、大人相手に遊ぶしかありません。また、小学校で出される宿題が多く、遊ぶ時間も限られています。特に都市部では、長期休暇の時でも、受験に備えて毎日補習学校へ通わなければなりません。

このような状況の中で、親たちも、わが子が同級生の友だちとどのように過ごしているのか知らないことが多いそうです。ご時世とはいいながら、外で元気に遊ぶ子どもたちの姿は失われた光景となっており、たまに校庭でゴム跳びをしている少女たちを見かけると、懐かしさが込み上げてくるということでした。

表紙写真「ソバの収穫」（ミャンマー） 撮影者 吉田 実

コーカン特別区のロンタン村では、麻薬のケシに代わる換金作物として、日本の支援で導入されたソバを育てています。ソバが見事に育っていたので、写真を撮って良いかと尋ねると、女性がそのソバを根こそぎ手に持ち、笑顔でポーズをとってくれました。

## アジアの風景

～読者から寄せられたアジアの人びとの生活を紹介します～

### バザールのキムチ売り（キルギス）



首都ビシュケクにあるオシュ・バザールにて。キルギスは、同じく旧ソ連から独立したカザフスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタンとあわせて中央アジア5カ国と呼ばれます。これらの国のバザールでは、朝鮮族の女性が中央アジア風のキムチを販売する姿をよく見かけます。また、国民の約65%を占めるキルギス人は、日本人とよく似た顔をしているので、思わず親近感を覚えます。

（写真提供 福岡市 大杉 卓三）

## 賛助会員募集

2009年度の賛助会員を募集します。皆様からいただきました会費は、アジア・太平洋地域を中心とした女性の地位向上と連帯・発展を目指す事業の実施に役立てております。会員特典として、有料出版物の割引制度（直接ご購入の場合のみ）などもございます。

ぜひご協力のほどをお願い申し上げます。

### 年会費

法人会員	1□	20,000円
個人会員	1□	3,000円
学生会員	1□	1,500円



KITAKYUSHU FORUM ON ASIAN WOMEN  
財団法人 アジア女性交流・研究フォーラム

〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4 北九州市大手町ビル 3F  
TEL (093)583-3434 FAX (093)583-5195  
E-mail : kfaw@kfaw.or.jp URL:http://www.kfaw.or.jp

